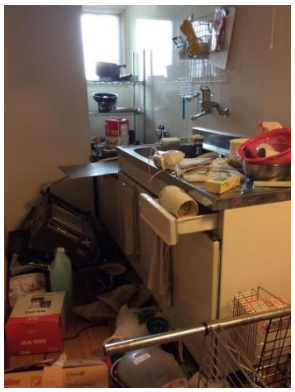
熊本地震と私

ディヌーシャ　ランブクピティヤ（スリランカ）

私はディヌーシャ　ランブクピティヤと申します。スリランカ出身です。仕事の関係で、４月１日から家族と一緒に熊本に引っ越ししてきました。熊本地震に遭ったのは、引っ越しして来てちょうど二週間目になった日です。本稿では、熊本地震を経験し、被災した一人の外国人として、私の体験及び私が感じたことを記します。



本震後の我が家の中

地震直後に私が一番つらく感じたのは、孤独感です。これは、熊本に引っ越しして来て二週間しか経っていない私には、日本人の知り合いも母国人の友人もあまりいなかったため感じたことだと思います。避難場所はどこかも十分わかっていなかった私が、前震直後に、主人と小学生二人の子供　（長女 10 歳、長男７歳）を連れて、すぐ子供の小学校に避難しました。子供を通わせはじめてまだ４日間しか経っていない私達にとっては、子供の小学校の先生方、保護者の方々、児童などもそれほど顔見知りではありませんでした。

自衛隊が小学校の運動所に作ってくれたテント。本震の時に私達家族はこのテントの中にいたので、よかったです。

小学校で私が救われたのは、さっちゃん（仮名）でした。小学校に来た私達を見かけたさっちゃんが長女の名前を呼びながら、私たちの近くに走って来てくれました。後ほど、長女に聞いたら、さっちゃんは、長女と同じく、同じクラスに転入してきたばかりの９歳の子で、長女と仲良しでした。しかし、私とさっちゃんの出会いは、避難所で初めてでした。避難所では、声をかける・かけられる誰もいない私達家族にとっては、よく話をしてくれて一緒にいてくれるさっちゃんは大変救われる存在でした。

震災が起きて三日目には、スリランカ人の家族が私達のいた小学校に避難してきたときに、私たちは大変心強く感じました。孤独感からも逃れました。

また、少しでも知っている友達や知り合いから電話をいただくと、私は大泣きでした。賃貸マンションに住んでいたため、実は、震災で私が無くしていたのは、家の中の家具や電化製品のみでした。それでも、引っ越し直後に起きた震災で私は、複雑な気持ちになり、落ち着かない毎日を送っていました。余震を怖がる子供達をしばらくの間、福岡の友達の家に預けたこともその一つの原因でした。

子供の精神を考え、安心かつ安全に暮らせることを優先にし、私と主人は、震災直後から必死で新しい引っ越し先を探しました。そのような中、震災以前に借りていた家の解約の件で大家さんと揉めることにもなりました。

最後に、熊本地震を経験し、被災したことで私が学んだことを一つ記します。震災が起きた時に、外国人も日本人も孤独さを感じるが、互いに話し合う、声をかけ合うだけで、その辛さを無くすことができるということです。相手に声をかけるには、少し勇気がいると思いますが、他に何もかかりません。声をかけられたことによって、被災者、時に外国人被災者が大変救われます。

５月14日の日経新聞に載っている私と主人の写真では、スリランカ人友達の家族３人と私の家族４人がこのトラックに寝る毎日でした。